

AI という鏡を見つめて

智辯学園中学校 3年 原口 美桜

皆さんはAIをどのように使いますか？知らないことを知るため、悩みを打ち明けるため、生活を便利にするため・・・など、様々な使い方をしているでしょう。私の場合は、AIを物語の感想を聞くために使っています。

近年のAIの進化には目を見張るものがあります。問いを投げかければ瞬時に答えが返り、悩みを解決し、時には人生相談にまで乗ってくれます。そんなAIが身近になった今、私はある試みをしました。それは、自分が一生懸命に創作した物語をAIに読んでもらい、感想を求めてみたことです。趣味とはいえ、自分が頑張って書き上げた世界を誰かに見せるのは、たとえ相手が機械だとしても、すごく緊張しました。送信ボタンを押した後、返信が返ってくるまで、私は期待と不安が入り混じった、言葉にできない高揚感の中にいました。

返ってきたのは、私の作品を尊重してくれる温かな言葉でした。ストーリーの構成を理解し、私のこだわった部分を見抜いて、「登場人物の心情をしっかりとかけていてよかったです。」と、私の感性を肯定してくれる内容でした。自分の頭の中にしかなかった物語が、初めて外の世界に認知され、認められたような感覚。それは確かに一つの救いであり、私はなんとも言えない充足感に包まれました。

しかし、その喜びを噛みしめれば噛みしめるほど、私の心には小さな「不安」が渦巻き始めました。AIは、私の物語を本当に「面白い」と感じてくれているのでしょうか。ご存じの通り、AIには人間のような感情はありません。彼らが提示するのは、あくまで過去の膨大なデータと照らし合わせた「正解に近い感想」に過ぎません。どれほど熱い言葉で褒められても、それは計算されたデータなのだと思うと、満たされていた心にふと冷たい風が吹き抜けるような寂しさを感じました。

同時に、私はもう一つの不安に直面しました。それは、「人がこの作品を読んだとき、同じように受け止めてくれるのだろうか」という問いです。AIは私の意図を完璧にくみ取り、常に「理想的な読者」として振る舞ってくれます。しかし、現実の人間はもっと気まぐれで、時には残酷なものです。私のこだわった描写を読み飛ばすかもしれませんし、あらすじを読んだだけで「つまらない」と切り捨てるかもしれません。AIという優しく穏やかな鏡の中では完璧に見える私の物語も一歩現実の社会に出れば、誰にも見向きもされない石ころのような存在になってしまうのではないかと。そう考えると、AIからもらった肯定の言葉が、私を現実から遠ざける「甘い罠」のようにも感じられました。

そもそも、私が物語を書くのはなぜでしょうか。それは、自分一人の頭の中に閉じ込めておけない感情やストーリーを誰かに共感してほしいからだと思います。時には誰かに非難されるでしょう。でも、それもまた物語を書く上での醍醐味だと思います。AIとの対話では、その醍醐味を味わえません。摩擦のない、滑らかな肯定の言葉だけでは、本当の自分は育たないんだと気づきました。

もちろん、AIに感想をもらうことが無意味だとは思いません。自信を失いそうなとき、AIの肯定的な言葉は、何かを続けるための大きな支えとなるでしょう。しかし、それをゴールにしてはいけないんだと考えます。AIに認められて満足するのではなく、その喜びを「一歩踏み出し、他人に届けるための勇氣」に変換すること。AIという鏡で自分の姿を整えたなら、次は勇氣を持って、鏡のない外の世界へと出ていかなければなりません。

これからの時代、AIはあらゆる創作活動のパートナーになるでしょう。だからこそ、私はあえて「不確かな他人」とのつながりを求め続けたいと思います。